

事後評価報告書

インドネシア スンダ海峡津波「国際緊急共同研究・調査支援プログラム(J-RAPID)」

1. 研究課題名：「スンダ海峡津波の被害と住民の対応の調査」

2. 研究代表者名：

日本側：早稲田大学 理工学術院 教授 柴山 知也

相手側：スマトラ工科大学 海洋工学科 学科長 ヘンドラ・アチアリ

3. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

本研究では、研究計画に沿って迅速に実施した津波痕跡高の予備調査の結果を整理するところから開始され、現地でのアンケート調査も住民の津波災害記憶が新鮮な時期に行えたことから、被害状況が適切に把握でき、避難の際に人があふれていたことが問題であることを明らかにしている。また、こうした調査結果を用いて津波数値計算を実施するなど、今次津波の生成・伝播メカニズムを明らかにしている。とくに、こうした研究からアナク・クラカタウ火山の崩壊量を推定できたことは大きな成果と評価できる。これらの成果は研究論文として国際誌に発表されている。

一方、他の研究グループによる津波数値計算結果との比較や、数値計算結果と被害状況との関連などで不十分なところが見られる。とくに、海岸線から 200m以内を整備すべきという提言については、次回の噴火による津波が 200m以内になる保証が示されておらず、提言の有効性が今回と同程度以下の山体崩壊に限定される。また、今回の津波発生に関して現在では、山体の海中部分がどの程度崩壊したか、陸上部と海中部分の比率はどの程度かなどの情報が重要であると考えられつつあり、本研究で実施された水深探査データを活用した海底部分の地形変化に関する今後の考察が望まれる。

(2)交流活動の評価について

現地でのシンポジウムや調査には、日本国内の若手教員と学生、および Sumatra Institute of Technology に所属するインドネシア国内の若手教員が参加するなど、活発な交流が見られる。こうした活発な交流の中で相手国の研究者の尽力により、迅速に活動許可証を取得できたことが大きな成果につながった一因であるといえる。また、こうした交流は、防災分野における両国間の長期的な協力体制の構築への寄与となることが期待される。

(3)その他

今回の山体崩壊に起因する津波の特徴は波長が比較的短く、被害が甚大な場所が海岸線からおよそ 200m 程度に集中していたことは事実であろうが、この地域の今後の津波被害対策として提言されている“海岸線から 200m以内の避難路整備を優先的に進める”施策についてはさらな

る検討を要すると思われる。

以上